

山と博物館

第32巻 第10号 1986年10月25日 大町山岳博物館

アルプス動物園開園25周年を祝う

大町山岳博物館と友好提携を結び、さまざまな交流を進めているインスブルック市のアルプス動物園が開園25周年を迎えた。

この動物園は創設の理念の一つとしてヨーロッパアルプスの動物たちを広く紹介して、野生動物愛護の思潮を高めることがあげられている。対象となる山岳に違いがあっても日本アルプスを対象に同様な考えをもちながら活動を続けてきた大町山岳博物館と、その願いと活動はきわめて類似した共通性をもっていた。

両者の施設は相互の交流を通じて友好と理解を深め、お互いの願いを達成するために、友好提携の締結にまで発展した。

アルプス動物園は25周年を迎えて数多くの記念事業を企画し、その一環として大町市に記念式典の招待状がとどけられた。大町市ではこれに答えるために市民友好訪問団を組織して式典に出席した。25周年を迎えた動物園の諸施設は友好提携を結んだ三年前と較べ

て目をみはるほど充実整備されていた。イワナなどの淡水水族館が新設され、クマの放養施設や小鳥の連棟飼育舎の拡充整備が進み、新設された管理棟には飼育動物用の餌を生産するため、ネズミや小昆虫の増殖施設が研究所の実験動物飼育場のように並んでいた。

記念式典は動物園の運営にあたる協会関係者、活動を援助するインスブルック市・チロル州の行政関係者、市民の支援団体である友好協会の関係者を中心となり、近隣諸外国の動物園関係者や大町市訪問団など招待者を含めて盛大な催しであった。

私どもは北アルプス山麓の大町市からアルプス動物園の25周年を心からお祝い申し上げるとともに、いよいよ発展充実することを祈っている。そして、山岳の自然や動物に深い理解と愛情をもった多くの人々の輪が、インスブルック市と大町市を核として全世界に広がることを願っている。

(大町山岳博物館長 平林国男)



25 JAHRE
FORSCHUNG UND NATURSCHUTZ
ERHOLUNG UND BILDUNG
FESTSCHRIFT

チロルの風土と民俗・民芸品寸見

長沢 武

はじめに

今年(一九八七)九月下旬、大町市と姉妹提携を結んでいる、オーストリアのインスブルック市を訪れる機会に恵まれた。

旅行の目的は、インスブルック市営のアルプス動物園の二十五周年記念行事に招待され、民間使節団としてこの行事に参加し、併せてチロル地方を視察し友好を深めようというものであった。

滞国すると早速団長の平林博物館長から、分担でその視察記を求められ、私には表題のようなテーマが課せられた。

我われはインスブルックに三泊し動物園の記念行事に参加した他、シュチュールバイタール溪谷に入り、シャーフスビツェル山(三四〇〇m)にロープウェイで登り、翌日はケルウエンデル地方を通り、ドイツのミュンヘン往復。その翌日はイン川に沿ってアールベルグ地方を経てスイスへ抜けたに過ぎないで、チロルの風土や民俗について述べるが、ではないが、私なりに感じたままを記して賣めをはたしたいと思う。

チロルというところ

チロルハットの登山帽で有名なチロル地方とは、オーストリアの西部インスブルックを州都とするチロル州(北及び東チロルと呼ばれている)と、南チロルと呼ばれているイタリアのアディジェ川上流の、トレンティノ・アルト・アディジェ州地方を含めた、北海道

の四分の一くらいな面積の範囲をいう。

チロルは全体に高く美しい山を持ち、中央にそびえるエッターアルプス及びホーエタウエルン山脈、北縁のバイエルンアルプスなど山麓に広がる緑のジュータンを敷きつめたような牧場と共に、風光明媚な景観を作り、この間に村落が点在している。

我われが見たのは北チロルだけであるが、ここは石灰岩の二一三〇〇m級の岩山が、前山も無く麓から直接そびえ立ち、イン川がこの山脈に沿って流れ、なだらかな段丘や山



写真1 ウィンドに飾られた華麗なチロル刺しゅう

腹の緩傾斜地は総て牧場で、家の窓という窓には真赤なアイビーゼラニウムの花が飾られ、絵のように美しい眺めであった。

チロルの気象

風光明媚なチロルも緯度が高いため、冬は極めて日照が少なく、白夜の状態が続くという。空も建物も灰色の日が続き、朝は十時を過ぎないと太陽が昇らず、

午後は三時には入ってしまうという。だから子供達は暗い中を学校に行き、真暗な中を帰ってくるという。

しかし内陸部であるので良質の雪が降り、雪が降ると牧場であるため何処もが自然のスキー場と化す。ザンクトアントン、ザンクトクリストフ、キッツビュエルなどには世界的に有名なスキー場があり、州都のインスブルックでは、一九六四年と一九七六年に冬季オリンピックが開かれている。

暮らしと産業

我われがかい間見た限りでは、チロルは町部を除き農村部は限りなく牧場が続き、畑といえは僅かに飼料用のトオモロコシ畑だけで、家の近くには野菜畑も花畑も見られなかった。日本では何処へ行っても見られるぼんこつ車の山や建設現場が、ここでは全く見られなかった。電線は地下埋設、長距離トラックもあまり走っていない。また洗たく物を干している風景も見られなかった。

車道にはガードレールがなく、河川を見てもコンクリート張りや砂防堰堤も見えず、護岸はゆるやかな勾配の自然石の空石積みで



写真2 豪華なヨーロッパ式暖房器

こんな次第であるから、農村部では働いている人の姿は見られなかった。是非農家に寄って話をしてみたいと思ったが、旅行日程に無いのでそれも許されなかった。

ガイドの話によると、ヨーロッパでの村落発達の過程は、先ず教会ができ、それから集落ができてゆくとのこと。バスで三日間走って、牧場の続く山あいに点在する多くの集落を見たが、集落は大概数十戸のもので、何処の集落にも真中に尖塔を持つ教会が必ず見られた。

自然と災害

チロルは大部分が農村部で、牧場が限りなく続き、牧場の先はドイツトールヒを主体とする森林部分で、高度は急に高まり山の七合目より上は岩山というスタイルの山脈が続いている。

日本のように森林におおわれた前山はほとんどなく、二一三〇〇mの高岳がすぐ眼前に見える全く迫力のある山岳を持つている。

ところがこの地方には台風の襲来もなく、従って洪水や土砂の流出が少なく、砂防堰堤



写真3 チロルの臼と杵

今回の旅行では、ヒントーホルンアルムの山小屋での晩さん会で、民俗衣装に正装したヨーデル歌手の男性にお目に掛かった。この晩さん会に集まった人達の服装は、男も女も日本人とほとんど同じ服装であったが、歌手の正装は、前日チロル民俗芸術博物館で見た民俗衣装の展示と同じものであった。

男性の正装は黒革の短靴に白布のゲートル、黒のスボンに白いワイシャツの上に赤のベス

トという姿である。山小屋で聞く本場のヨーデルは、よく衣装に合っているように思えた。博物館の展示で見ると、女性の正装はTVでおなじみの「大草原の小さな家」のお母さんの衣装にそっくりで、ウエストの部分でキユツとしまり、ふんわりと広がったスカート部分が印象的であった。

なお男女とも、衣装には細かな刺しゅうがそれぞれ施されているが、この刺しゅうがチロルの伝統民芸として有名である。

冬の長いチロルでは、昔から男は彫刻に女は刺しゅうに力を入れているのが伝統で、今も町の民芸品店には虫眼鏡で見なければ分からないような、繊細華麗な刺しゅうが売られている。

衣

食

今回の旅行を通じて、ヨーロッパ人は常日頃の食事は質素であるが、晴れの日のメニューは豪華であることを知った。

ホテルやペンションの朝食は、何処でもジヤムやバター付きのパンの他、コーヒーカミルク、それにゆで卵かハムが付けば上等の方であった。

ところが招待を受けた二回の夕食と二回の昼食パーティーのメニューは豪華そのものであった。三回とも大きな部屋一杯の招待客があったが、まず会場に着くと日本ならお茶を一杯というところであるが、ワインとジュース入りのグラスが沢山用意されていて、これを受取り飲むのである。もちろんおかわり自由。こうして全員が揃うまで飲み、談笑する。そして全員が揃うと正室へ案内、パーティーが始まるが、会場入口にはあらん限りのごちそうが十数品も並んでいた。

住

ヨーロッパは地震の無い国である。従って数百年前に建てられた石造の古い建物が今も健在で使用されている。

チロルの一般民家はほとんどが煉瓦作りで、皆一年がかりで自分で作っている。たいていの家は地下室を持ち、洗たく物を干したり、窓辺に飾った花のブランターをここで越冬させ、翌年また使うという。

ほとんどの家の屋根は切妻で、外壁は白壁窓は日本ほど開放的でなく小さい。これは冬の寒さがきびしいためであろう。

山間部の家や牧舎は木造で、屋根は石置き板葺きである。

暖房器

写真2はカーヘルと呼ぶヨーロッパ式暖房器で、一見部屋の片隅に置かれた調度品のように見えるが、実は陶製で高さ二m以上もある立派な置物風のものである。

表面は立派だが内は空洞になっていて、この暖房器は各部屋とも一つの隅にあって、それぞれは見えない所で連結していて、一ヶ所で火を焚くとその熱が伝わる仕組みになっている。

これは近世のもので、何処の王宮でも見たが、一般家庭でも使われていたという。

家具と調度品

チロルの家具や調度品を博物館で沢山見た。その中には日本のものに随分似たものが多いが、地球は広く生活様式は違いますが、発想



写真4 豪華な彫刻を施したチロルのダンス

には共通性があるなあと考えた。ただたんす類や椅子、ドア、馬具、遊具などには手の込んだ彫刻が施されており、さすがは芸術の国だなあと感心した。

たんす・長持たんす類は部屋の調度品として極端なまでに彫刻や色彩を施してあるが長持は無彫刻で、丸味を持ったふたまでが日本のもので姿形がそっくりである。

臼と杵は白は直径三〇cm高さ一m弱で内が深くくり抜いてある。これを見て戦争中一升びんで米を搗いたことを思い出した。

錢箱は鉄製のがんじょうなもので姿形は日本のもと同じである。

桶は日本のもと同じであるが、ヨーロップには竹が無いのだが、はあま皮をへぎ用いている。従って日本のように深い桶は無い。

この他馬具のほも、すきやはた織機、くしかんな、背負子などいづれも日本のものとはほとんど同じか似ている点に驚いたり感心した。

(山岳博物館嘱託員)

信濃にちなむ山の植物(1)

田畑真一

一、はじめに

田中澄江女史は、信濃にちなむ高山植物について、つぎのように(田中女史「私の好きな山の花」)ふれている。

「信濃は周囲皆山の国なのに、シナノの名がつく高山植物が、シナノオトギリ、シナノナデシコ、シナノキンバイの三つぐらいなのは残念である。」

なるほどシナノオトギリなどは、シナノの名がつく高山植物である。しかし、関係の高山植物がこの三つくらいと断定する紹介こそ、残念である。なぜなら、他にもいろいろなものがあるからで、はつきりいわせて頂ければ、紹介は誤りだからである。

そこで、この点について、補正を試みたい。同時に、この機会に関係の植物についての紹介もしてみたい。なお、高山植物についての定義であるが、これは丸山尚敏氏が「高山帯に特有な植物の総称であるが、一般には亜高山帯、もしくは低山帯に生育する多数の種類を含めて高山植物とよぶ」(山と溪谷社「世界山岳百科事典」という通説に従いたい)。

二、まずはシナノサイコ
たとえばシナノサイコがある。これは信州大学の清水建美博士のいわれるように(清水博士「原色新日本高山植物図鑑(1)」)、ハクサンサイコの一つである。清水博士は、その生育地について「本州(東北・中部地方)、中生草地、亜高山帯にも多い」(清水博士、

前掲書)といわれる。横内文人氏らは、これが長野県の北安曇郡に生育することを伝え、あわせて金山、八方尾根が産地であることを示している(横内氏ら「長野県植物ハンドブック」)。

また京都大学名誉教授の北村四郎博士らは、アズマザサの別名として、シナノザサの記名(北村博士ほか「原色新日本高山植物図鑑木本編(II)」)をあげている。横内氏らは、これが長野県の上水内・下高井・北安曇・南安曇・諏訪の各郡に産することを伝えている(横内氏ほか、前掲書)。

さらに奥山春季氏は、シナノコザクラをあげ、「淡紅色で径二・五〜三cmの花が咲く多年草で、深山に生える」(奥山氏「新訂増補原色野外植物図譜I春から初夏」という。ちなみに河野節蔵氏は、古く昭和六年、その生育地について「本州中部」(河野氏「日本高山植物図説」と紹介した。横内氏ら(以下、書名を省く)は、これが長野県の諏訪・上伊那・下伊那の各郡に産することを伝え、あわせて南アルプスが生育地であることを示している。

さらにまた牧野富太郎博士は、シナノヒメクワガタをあげ、「果実の先がへこまないものを(田畑注、ヒメクワガタの)シナノヒメクワガタといい、中部地方南部の高山にはえる」(牧野博士「原色牧野植物大図鑑」という。奥山氏も「乗鞍岳、木曾駒、仙丈ヶ

岳、北岳のほか南アルプスに広く分布する」(奥山氏「新訂増補原色新日本野外植物図譜2夏・高山植物」という。横内氏らは、これが北安曇・南安曇・木曾・上伊那・下伊那の各郡に生育することを伝えている。

牧野博士は、シナノアキギリもあげ、「長野県松原湖付近の林中にはえる多年草(田畑注、中略)和名は信濃の国に産する秋桐」(牧野博士、前掲書)という。横内氏らもこれが長野県の佐久方面に生育することを伝え、あわせて松原湖畔が産地であることを示している。

そのほか奥山氏は、シナノキイチゴをあげ、「木曾駒ヶ岳などに産する」(奥山氏、前掲書)という。横内氏らは、これが長野県全域に産することを伝えている。

奥山氏は、シナノクロウメモドキもあげ、「雌雄別株の落葉低木で山地に生える」(奥山氏、前掲書)という。

奥山氏はまた、シナノクロユリについてもふれ、「(田畑注、上略)木曾駒ヶ岳産の小型で花をつけるしなのくろゆりおよび北海道産のきばなくるゆりを記載した」(奥山氏、前掲書)という。横内氏らは、これの異名をクロユリとしている。

三、さらにシナノと名づく植物

シナノと名づくさらにその他の植物。これを横内氏らの紹介を中心にしながら列挙しておこう。ただ、なかには高山植物といえないものも一部含むが、これも関連の列挙ということでご了承願いたい。

まずはシナノアキノキノリソウ。横内氏らは、これの異名をミヤマアキノキノリソウとしている。

つぎにシナノイラクサである。横内氏らは、

これらの異名をミヤマアキノキノリソウとしている。横内氏らは、これが佐久方面に生育することを伝え、あわせて御牧ヶ原が産地であることを示している。

さらにシナノカリヤスモドキである。横内氏(以下、芳名を省く)らは木曾郡に生育することを示している。

シナノカワラマツバ。これも木曾郡に生育することを伝え、あわせて霧ヶ峰や落合が産地であることを示している。

シナノキは長野県の全域に生育することを伝えている。

シナノクロツバラは下水内・上水内・下高井・更埴・上伊那の各郡に生育することを伝えている。異名はオゼノクロウメモドキだという。生育地については北村博士も「本州(中部地方)以北」(北村博士、前掲書)という。さらにまたシナノコザサの異名がアズマザサだという。

シナノザクラは、上水内・北安曇・上伊那の各郡が生育地であることを示している。なお、シナノザクラは、小泉秀雄氏の名づけた呼び名である。(日本山岳会員)

一つづく

山と博物館 第32巻 第10号
 一九八七年十月二十五日発行
 発行所 長野県大町市 TEL220-11
 印刷所 大町山岳博物館
 大町山岳博物館
 定価 年額 一、二〇〇円(送料共(切手不可))
 郵便振替口座番号(長野四一)三三九三